重要文化財旧三笠ホテル建造物保存修理工事（第1期）が完了しました

老朽化した旧三笠ホテルを保全するため、令和2年1月からスタートした「令和元年度　国補　重要文化財旧三笠ホテル建造物保存修理工事（第1期）」が令和4年3月に完了しました。この工事では、建物の解体を行うと共に、実測調査と過去の痕跡調査を行いました。

※写真提供：(公財)文化財建造物保存技術協会・清水建設(株)

屋根の解体が完了した様子を、東から撮影した写真です。建物はコの字型平面で、中央左側のブルーシートの下部が正面エントランス前になります。
解体は部材を再利用できるよう手作業で丁寧に行います。解体していない部材もありますが、これらは劣化が無い健全な部材で、耐震補強にも影響がないため解体は行いません。

ダイニングルーム内部の解体が完了した様子です。しっくい壁を解体する際に、浮きや割れ等の不具合が無かった箇所は部分的に残しています。一般的な工事では全て解体してしまいますが、文化財にとって、当初の仕様だけでなく、過去の改修履歴も貴重な資料です。現代では見えなかったことが後世で判明することもあるため、できる限り残しています。

ダイニングルームの外壁南面には車寄せの痕跡が残っていました。大正後期頃に増築された車寄せは、昭和の曳家時に解体されたため詳細は不明でした。今回の調査で、既存外壁板を取外さずに設置していたことや高さ、屋根の勾配等が分かりました。

1階床組部材の多くは昭和の曳家時に取替えられていますが、リビングルームの床組には当初材が残っていました。当時の大引は製材していない材料を用いているため、歪みやねじれがあります。しかし、大工の技術でほぞ穴※の位置や高さを巧みに変え、床をフラットにしています。

※ 2つの部材をつなぎ合わせるため、一方の材に設けた穴

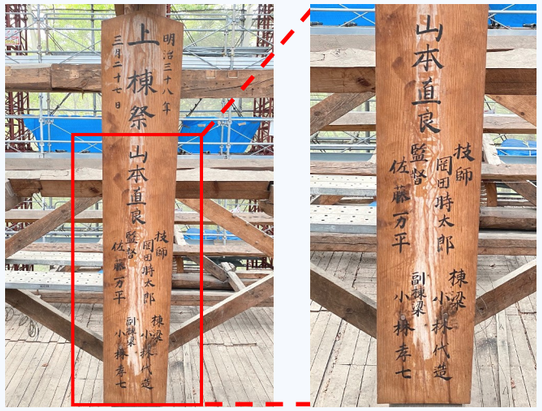
工事中は、建物全体を覆う「素屋根」を設置しています。素屋根とは、屋根と外壁を解体する建物を、雨や風等から守るために設置する仮設物です。旧三笠ホテル全体を覆っているため、建物よりもひと回り大きいです。

外壁板を取外す前の様子です。部材ごとに「番付札」と呼ばれる小さい板を取付けています。番付札には「位置・番号・部材の名称」が記載され、解体した部材を元の位置に戻すためには欠かせません。

外部に面した柱の劣化が激しい箇所は、柱を取外しています。取外した柱は補修して再度取付けますが、それまでは仮柱を入れて周囲を支えます。

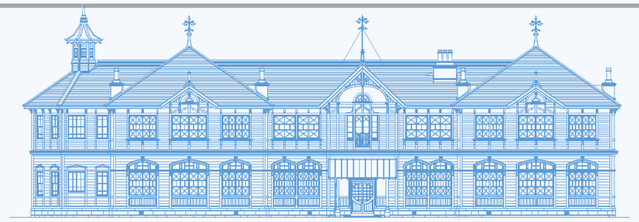
客室の床に敷かれていたリノリウム※を解体したところ、床の周囲四方が赤茶色に塗装されていました。調査したところ、中央に敷物が敷かれていた時代があったようです。

※ アマニ油や木粉、コルク等の天然素材から製造された床敷物



中央エントランスの小屋組みには、明治38年に行われた上棟祭の棟札が残っています。札には、施主の山本直良、技師（設計者）の岡田時太郎、監督の佐藤万平、棟梁の小林代造、副棟梁の小林孝七の名が、それぞれ書かれています。

工　事　名：	令和元年度　国補　重要文化財旧三笠ホテル建造物保存修理工事（第1期）
設計・監理：	公益財団法人　文化財建造物保存技術協会
施　工　者：	清水建設株式会社
工　　期：	令和2年1月10日　～　令和4年3月25日



※本事業は国（文化庁）及び長野県の補助金を受けて実施しています。